

## 中学校英語教科書に見られる実践的コミュニケーション能力

山 森 直 人\*, 藤 田 隆 子\*\*, 武 知 一 誠\*\*,  
秦 慶 樹\*\*, 伊 東 治 己\*

(キーワード: 英語教科書, 実践的コミュニケーション能力, 場面設定, 会話分析, 言語機能)

### 0. はじめに

中学校では今年(2002年)度より新学習指導要領(1998年告示)に基づく新しい教科書が使用されるようになった。本研究では、新しい英語教科書を実践的コミュニケーション能力の観点から分析することを目的としている。

まず、1) 実践的コミュニケーション能力の概念について検討すると同時に、2) コミュニケーションの観点から行われた教科書分析の先行研究を概観する。次に、3) 実践的コミュニケーション能力の観点から教科書を分析するための枠組みを設定し、その枠組みをもとに中学校英語教科書を分析、考察する。そして、4) 考察をもとに本調査の英語指導に対する教育的示唆と今後の課題を述べる。

### 1. 「実践的コミュニケーション能力」とは

1998年に告示された文部省学習指導要領外国語科では、「外国語科の目標を実践的コミュニケーション能力の育成とし、コミュニケーション能力の基礎を養うことを一層重視した」とあり(文部省, 1999, p.4)、「実践的コミュニケーション能力」を次のように定義している。

「実践的コミュニケーション能力」とは、単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっているというだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力のことである。(文部省, 1999, p.7)

さらに、「実践的コミュニケーション能力の育成のための言語活動を指導する上で参考とし、言語を使用する学習により具体性をもたせるために(p.11)」、言語の『使用場面』と『言語の働き』が例示されている。具体的には、「これらの例に限定されるものではない(p.25)」としながらも、次のような例が挙げられている。

#### [言語の使用場面の例]

- a 特有の表現がよく使われる場面
  - ・あいさつ ・自己紹介 ・電話での応答
  - ・買い物 ・道案内 ・旅行 ・食事 など
- b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面
  - ・家庭での生活 ・学校での学習や活動
  - ・地域の行事 など

#### [言語の働きの例]

- a 考えを深めたり情報を伝えたりするもの
  - ・意見を言う ・説明する ・報告する
  - ・発表する ・描写する など
- b 相手の行動を促したり自分の意志を示したりするもの
  - ・質問する ・依頼する ・招待する
  - ・申し出る ・確認する ・約束する
  - ・賛成する/反対する ・承諾する/断る など
- c 気持ちを伝えるもの
  - ・礼を言う ・苦情を言う ・ほめる
  - ・謝る など

「言語の使用場面の例」に関しては、「特有の表現がよく使われる場面」や「生徒の身近な暮らしにかかわる場面」という言葉からも分かるように、生徒が日常生活のなかで頻りに遭遇する場面の設定が期待されている。また、学習指導要領の解説書(文部省, 1999, pp.26-27)ではそのような場面に特有の表現例が示されており、いずれの例も2者(AとB)による対話形式がとられている。

「言語の働きの例」は、Wilkins(1976)やMunby(1978)により理論的な枠組みが提示され、van Ek(1975)によりThreshold Levelとして具体化された(伊東他, 1993, p.78)概念・機能シラバスが簡潔に示されたものと考えられる。概念・機能シラバスは、文法項目が羅列された構造シラバスとは対照的に、学習者の言語使用(言語規則ではなく、学習者の発話行為や、ある社会状況において学習者が言語を通して達成する目的などの言語の社会的機能、あるいは言語のもつ概念(Breen, 1987, p.88))に基づき言語知識が再定義、項目化されたシラバスであ

\*鳴門教育大学言語系(英語)教育講座

\*\*鳴門教育大学大学院

る。上記の例 a, b, c それぞれの項目内に「考え」「意志」「気持ち」といった言葉が使用されていることから、現行学習指導要領では、事実・事態の陳述のような単なる客観的な情報を伝達するための言語機能ではなく、「主観的な情報のやり取り」のための言語機能が強調されていることが分かる。

以上を考慮すれば、学習指導要領が想定する実践的コミュニケーション能力とは、より具体的には、生徒にとって身近な「日常生活」において英語による「対話」を通じた「主観的な情報のやり取り」をする能力と考えられる。

## 2. 旧教科書における実践的コミュニケーション能力

教科書分析は、英語学習のインプットの性格を明らかにするという点で、英語教育学の主要な研究分野の一つとみなされ、日本においてもこれまで多くの研究がなされてきた（伊東他，1993，p.25）。また、教科書が日本の英語教育の方針を謳った学習指導要領にもとづいてつくられ、その方針にしたがって検定されたものであることを考えるならば、日本の中学生に求められる英語能力観の具体像とみることもできよう。現在の中学生に必要なとされる英語能力観が「実践的コミュニケーション能力」であるとするならば、それはどのように教科書に表れているのであろうか。

そこで、これまでに英語教科書を、1) 場面設定、2) 談話構造、3) 言語機能、の観点から分析した先行研究を概観する。それは、上記の観点からなされた教科書分析の結果を通して、実践的コミュニケーション能力の特徴、すなわち「日常生活」、「対話」、「主観的な情報のやり取り」、が過去においてどのように扱われてきたのかを把握するためである。それを知ることにより、現行学習指導要領に基づく英語教科書において、実践的コミュニケーション能力の特徴がどれだけ際立って具現化されたかを確認することができると考えられる。

1) 教科書における「場面設定」に関する分析を行った研究に伊東他（1993）がある。そこでは登場人物の国籍・年齢・性別と発信地域・発信場所をもとに、教科書の対話文がどのようなコンテキストにおいてなされているかが分析されている。特に発信場所に関しては、各教科書とも学校と家庭が大半を占め、中学生にとって自然なものと言える反面、英語での発話の必然性が損なわれている場合が多くみられることを指摘している。

2) 教科書にある「対話」文の特質を分析したものに廣地・長安（1993）などがある。そこでは談話の種類として Initiating, Responding, Adding を挙げ、概して Adding が占める割合が低いことから対話に発展性が乏

しく、自然さに欠けていることが指摘されている。

3) 教科書に現れる「言語機能」の特徴や割合を分析した研究に廣地・長安（1993）、真田（1995）、山森（1995）がある。これらの研究結果の傾向として、1989年版学習指導要領にもとづく教科書ではそれ以前の教科書に比べ扱われる言語機能の種類は豊富であり、種類間の偏りが是正されている。しかし、事実情報に関する情報を与えたり求めたりする言語機能の割合が、その他感情や態度を表したり求めたりする言語機能の割合に比べ圧倒的に多い。

以上を総ずるならば、これまでの英語教科書において扱われたテキストでは、1) 生徒の身近な日常生活が扱われる反面、英語を使用する必然性が乏しい場面設定がなされ、2) そこでなされる会話の談話構造は発展性や自然さに欠け、3) 意見や感情を述べる発話が少ない、といったコミュニケーション像が浮かび上がる。

## 3. 教科書分析調査

それでは、1998年告示の学習指導要領に基づき、新しく作成された教科書には実践的コミュニケーション能力が十分に具現化されているのであろうか。また、上述の旧教科書に見られたコミュニケーション像は改善されているのであろうか。以下では、以上の点を踏まえてなされた新教科書分析の結果を報告する。

### 3.1 調査課題

中学校英語教科書にみられるテキストを、1) 場面設定、2) 談話構造、3) 言語機能、の観点から数量的に捉え、学習指導要領の指針がどの程度反映しているかを分析する。

### 3.2 調査方法

#### 3.2.1 調査の枠組み

1) 場面設定については、伊東他（1993）を参考に、①学校、②家庭、③屋内、④屋外、⑤その他、というカテゴリを設けた。

2) 談話構造については Stenström（1994）の会話分析の枠組みを採用した。Stenström は会話の構成要素として「対話 (Exchange)」、「ターン (Turn)」、「ムーブ (Move)」などを挙げている。まず「対話」は異なる2人の話者による最少2つのターンから構成される。次の「ターン」は話し手が話を終えるまでの一連の発話の集まりであり、1つ以上のムーブから構成される。さらにその次の「ムーブ」とは、対話を開始、続行、完結するために話者がターンのなかでする行為を表す。本調査では、特に教科書に見られる会話の特徴や登場人物の相互交渉の特徴を分析するためにムーブの下位分析を行った。ムーブの下位項目は次に示す通りである。

①喚起 (Summons)	聞き手の注意を引く。
②話題 (Focus)	話題を確定する。
③開始 (Initiate)	対話を開始する。
④修復 (Repair)	対話を修復する。
⑤応答 (Response)	対話を維持・終了させる。
⑥再開 (Re-open)	対話の終了を遅らせる。
⑦継続 (Follow-up)	対話を終了する。
⑧確認 (Backchannel)	聞き手が相槌を打つ。

3) 言語機能分析のための枠組みについては、van Ek (1976) の Threshold Level が非常に有名であるが、言語機能の項目数が多過ぎるため、分析作業の効率と結果の信憑性を高めるためにも何らかの調整を加える必要がある。このような問題を解決すべく本調査では、(A)感情をともなった主観的な発言か事実情報に関する客観的な発言かという観点(主客)、(B)情報や意見を表現する発言か情報・意見・行動を要求する発言かという観点(表求)、そして、(C)肯定的な発言か否定的な発言かという観点(肯否)、を組み合わせることによりつくられる8つの言語機能に、挨拶などの定型表現を加えた9つの言語機能リストを作成した(表1参照)。

表1: 言語機能のカテゴリー

	A 主客	B 表求	C 肯否	言語機能
カ テ ゴ リ	1	1	1	①客観的情報を肯定形で表現する。
	1	1	2	②客観的情報を否定形で表現する。
	1	2	1	③客観的情報を肯定形で要求する。
	1	2	2	④客観的情報を否定形で要求する。
	2	1	1	⑤主観的態度を肯定形で表現する。
	2	1	2	⑥主観的態度を否定形で表現する。
	2	2	1	⑦主観的態度を肯定形で要求する。
	2	2	2	⑧主観的態度を否定形で要求する。
		3		⑨定 型 表 現
備 考	<A. 主客> 0:不明, 1:客観, 2:主観 <B. 表求> 0:不明, 1:表現, 2:要求 <C. 肯否> 0:不明, 1:肯定, 2:否定			

従来の言語機能分析では、1文の言語機能を確定するにあたり、100程度の言語機能の中から適切な言語機能の一つを選択するという手法がとられていた。本調査において開発した上記の言語機能分析ツールを使用すれば、一文に「主観的か客観的か」「情報の表現か要求か」「肯定か否定か」という3つのコードを入力するだけで言語機能が確定される仕組みになっており、時間的に効率的であると同時に、恣意的なコード化が避けられると考えられた。

### 3.2.2 分析対象

分析の対象として扱った教科書は、2002年2月発行の中学校外国語科用文部科学省検定済教科書(3社)、*New*

*Horizon* (東京書籍)、*Sunshine* (開隆堂)、*New Crown* (三省堂) の1学年から3学年までの合計9冊である。これらの教科書を選択した理由は、教育現場での採用率が高いことである(渡辺, 2001, p.4)。

### 3.2.3 分析手順

分析対象教科書の全てのテキストをマイクロソフト社 Excel 2002 に入力し、各文に1) 場面設定(①~⑤)、2) 談話構造(①~⑧)、3) 言語機能(①~⑨)の観点からコード番号を入力した。また、いずれのコードにも該当しないと判断された文は「不明」として分類した。コード入力にあたっては、恣意的な入力を避けるために、次のような手順を採用した。まず、入力者各人(3名)が教科書1社(1~3学年)を担当し、上記3つの観点すべてについてコード入力を行った。次に、3つの観点ごとに入力担当を決め、各人が与えられた観点から3社分の教科書に入力されたコードの確認を行った。また、入力の基準が3者間で統一されるように適宜話し合いの場を設けた。

### 3.3 結果と考察

分析対象となった文の総数は表2に示されるとおりである。そのうち発話(対話文として扱われている文:ムーブ総数)が占める割合は、*New Horizon* が63%、*Sunshine* が77%、*New Crown* が66%であり、いずれの教科書も読み物というよりもむしろ対話文に重点をおいたテキスト構成になっていることが分かる。また、1会話に占める発話(ムーブ)数は、*New Horizon* が6.3文、*Sunshine* が9.5文、*New Crown* が12.3文である。

表2: 分析対象発話

	<i>New Horizon</i>	<i>Sunshine</i>	<i>New Crown</i>
文 総 数	1324	945	1271
会 話 総 数	133	77	68
対 話 総 数	167	87	100
タ ー ン 総 数	440	410	390
ム ー ブ 総 数	837	730	839

#### 3.3.1 場面設定

*New Horizon* は対話がなされている場面が確定できないスキットが全体の36%を占める(表3参照)。これは、ポスター・新聞記事、市役所への投書、インターネットによるチャットなど、調査前に設定した分析枠組みでは分類できない場面設定がなされていることによる。コミュニケーションの媒体は単に口頭での会話や手紙だけではなく多様であること、及び、インターネットの普及にともないコミュニケーションの形態自体が変化していること、を考慮した場面設定が求められている。それ以外、いずれの教科書においても学校を舞台とする対話の割合が最も高く、特に *New Crown* に関しては全体の4

割が学校場面を占めている。また、いずれの教科書においても程度の差はあれ、家庭、屋内、屋外も満遍なく扱われている。以上を踏まえれば、学校生活を中心に日常を過ごす生徒にとって身近な場面を扱っているといえる。そこでは、学校でALT(外国人指導助手)や海外からの留学生と会話をする場面、海外の生徒とeメールでやり取りをする場面など、現在の学校状況においてもある程度遭遇する可能性のある英語使用場面が設定されている。

表3：設定場面の割合

場面	New Horizon	Sunshine	New Crown
不明	36%	14%	17%
学校	20%	29%	41%
家庭	13%	13%	9%
屋内	18%	22%	7%
屋外	10%	21%	15%
その他	5%	0%	11%

### 3.3.2 談話構造

1つの対話に占める話者のターン数と発話(ムーブ)数を算出した。その結果、1つのターンはいずれの教科書も平均2つの発話から構成されていることが分かった。Sunshineは1つの対話中のターン数が5つあり、メッセージの活発なやり取りがなされていると考えられる(表4参照)。

表4：一対話に占めるターンと発話の数

	New Horizon	Sunshine	New Crown
ターン数/対話	3 (2.63)	5 (4.71)	4 (3.90)
発話数/対話	5 (5.01)	8 (8.39)	8 (8.39)
発話数/ターン	2 (1.90)	2 (1.78)	2 (2.15)

(小数点以下を四捨五入。括弧内は元の数値)

それではこれらの発話が対話の中でどのような役割を果たしているのだろうか。それぞれの発話のムーブを分析することで明らかにする。図1は教科書ごとのムーブの下位項目の割合を示したものである。各教科書の談話構造を大雑把に把握するために10%以上の割合を示したムーブを挙げ、その流れを示すと、New HorizonとSunshineともに「開始→応答→再開」、New Crownは「話題→開始→応答」であった。

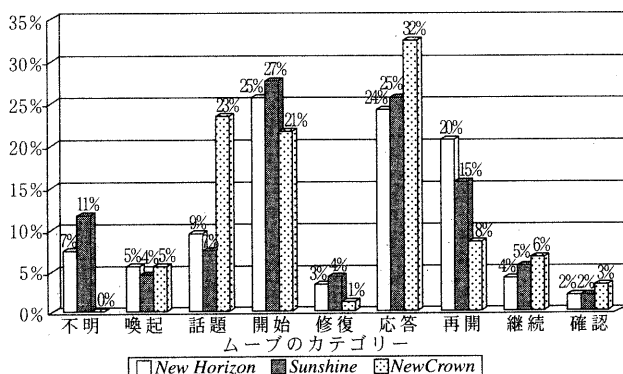


図1：教科書別のムーブ・カテゴリー割合

New HorizonとSunshineは同じ談話構造をもつが、1対話に占める各種ムーブの総数(表5参照)をみると、New Horizonは「開始(対話を開始するムーブ)」「応答(対話を維持・終了させるムーブ)」「再開(対話の終了を遅らせるムーブ)」それぞれ平均1文から構成されるのに対し、Sunshineは「開始」と「応答」がそれぞれ平均2文から構成され、対話を開始する際の発話や応答のための発話が単に1文で終わらないことがわかった。一方、New Crownは他の教科書に比べ、「話題(話題を確定するムーブ)」の割合が高く、対話が始められる以前に、まず何について対話をするかが明示される談話構造をもつ。また、「応答」が平均3文から構成され、1つの話題に関して多くの答えがなされる特徴をもつ。

表5：一対話に占める各ムーブの数

場面	New Horizon	Sunshine	New Crown
不明	0 (0.35)	1 (0.90)	0 (0.01)
喚起	0 (0.23)	0 (0.37)	0 (0.39)
話題	0 (0.45)	1 (0.59)	2 (1.97)
開始	1 (1.28)	2 (2.25)	2 (1.74)
修復	0 (0.17)	0 (0.31)	0 (0.10)
応答	1 (1.22)	2 (2.09)	3 (2.71)
再開	1 (1.03)	1 (1.29)	1 (0.68)
継続	0 (0.19)	0 (0.40)	1 (0.51)
確認	0 (0.13)	0 (0.20)	0 (0.28)

(小数点以下を四捨五入。括弧内は元の数値)

### 3.3.3 言語機能

言語機能についてはいずれの教科書においても「客観的情報を肯定で表現する」が全体の4割程度を占めていることが分かった(図2参照)。また、挨拶などの定型表現もいずれの教科書においても15%程度と同じような割合を示した。

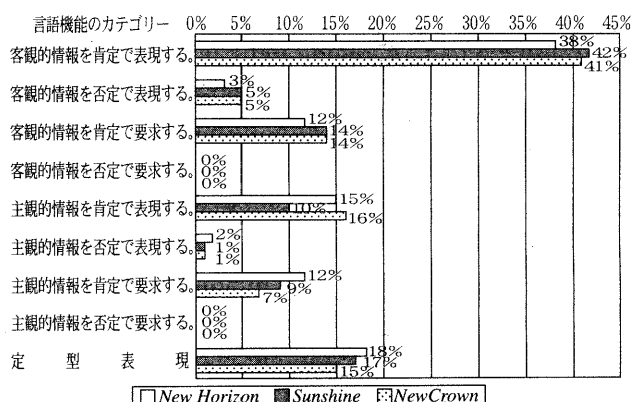


図2：教科書別の言語機能カテゴリーの割合

全発話数に占める客観的情報と主観的情報のそれぞれのやり取り(表現・要求)の割合は、教科書間で多少の違いが伺えるが、それぞれ5~6割と2~3割であった(表6)。また、情報表現と情報要求に関しても、全教科書において前者が6割程度、後者が2割程度であった。

そして、肯定表現・要求と否定表現・要求の割合は、いずれの教科書も前者が8割弱、後者が1割未満であった。それぞれの割合がどの程度であれば、質の高い言語機能の構成であるかは判断しかねるが、否定の表現・要求の言語機能の割合が少ない感は否めない。殊に否定による要求(例. ~してはいけません。~しませんか。等)に関しては皆無に等しい状態であった。

表6：言語機能

言語機能	New Horizon	Sunshine	New Crown
客観的情報	53%	62%	60%
主観的情報	29%	21%	24%
表 現	58%	59%	64%
要 求	24%	24%	21%
肯 定	77%	75%	79%
否 定	5%	8%	6%

#### 4. 教育的示唆

以上、新英語教科書の特徴を1) 場面設定、2) 談話構造、3) 言語機能、の観点から数量的に分析した。

1) 場面設定に関しては、生徒にとって身近な場面が数多く設定されていることが分かった。しかし、日常的な場面の設定が必要であるとしても、英語の授業以外で、生徒が英語を使用する日常的な場面はほとんどないというのが現実であろう。そのような中でも、学校生活や日常において生徒が遭遇する可能性のある、英語使用が必要となる場面を想定し、教科書に組み込むことが重要である。例えば、ALTや留学生との会話の場面やインターネットによる情報の収集、eメールを使用した情報のやりとり、海外への修学旅行などがそうである。今回の調査では、そのような場面が数多くみられた。

2) 談話構造に関しては、教科書ごとに異なる特徴がみられた。しかし、同じ教科書のなかでも、スキットにより談話構造が異なっていたことをつけ加えておく。そのような教科書内での談話構造の違いは、数量的にデータを処理した今回の調査手法では明示できなかった。対話の場面により、それに相応しい談話構造も異なることが予測される。今回の分析調査では、教科書にみられる談話構造の大雑把な現状把握にとどまったが、今後、教科書のスキットの談話構造がどのようなものであれば適切なものか、談話構造の研究と学習に関する研究の両知見を踏まえて究明していく必要がある。

3) 言語機能に関しては、教科書の登場人物が自身の主観的な意見や感情を述べたり、相手の主観的な意見や感情を尋ねたりする発話が少なからずあることが分かった。ただし、後者の場合、それを否定形で要求する発話(例. ~してはいけません。~しませんか。)は皆無に等しい状況であった。英語を使用する場面では常に異文化との接

触をとまなうことを考慮するならば、文化背景が異なる対話の相手に注意や禁止を促す表現は非常に重要な機能であり、そのような機能をもつ発話を加えていく必要がある。また、今回使用した言語機能分析ツール(表1)はコード化の簡便性を考慮して採用したものであるが、「(A)感情をとまなった主観的な発言か事実情報に関する客観的な発言か」を区別する際の判断が非常に困難であることが分かった。今後、改良を加え、一層使い易い工夫を施す必要がある。

#### 5. さいごに

本調査では、場面設定、談話構造、言語機能の割合の点で教科書ごとに異なる特徴が発見された。それは必ずしも教科書の良し悪しを意味するものではなく、指導者自身が、教科書の特徴を把握し、それを生かした指導をすべきである。

今後の課題としては、1) 学年を経るごとに教科書に描かれたコミュニケーションがどのように変化するかをの解明、2) 異文化理解・国際理解の観点を加えた異文化間コミュニケーションの視点からの教科書分析、3) 教科書の内容と学習の関係の解明、などが挙げられる。

#### 【参考文献】

- 伊東治己・中村嘉宏・今井裕之・杉野直樹・岡部純子・三浦省五。(1993)「外国語(英語)教育シラバスの理論と動向」『英語教育』大修館書店、9月増刊号、42(8)、71-97。
- 伊東治己・高津和幸・福嶋雅直。(1993)「中学校用英語教科書の中でのコミュニケーション成立状況の分析—発話コンテキストの特定化に焦点を当てて—」『中部地区英語教育学会紀要』23、25-30。
- 真田謙一郎。(1995)「中学校におけるオーラル・コミュニケーション・テストに関する考察」『中国地区英語教育学会研究紀要』25、235-246。
- 廣地美佳・長安憲一。(1993)「『発信型英語教育』と中学校用英語教科書」『中部地区英語教育学会紀要』23、79-84。
- 文部省。(1999)『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説—外国語編—』東京：東京書籍。
- 山森直人。(1995)「コミュニケーションを志向した英語教科書に関する一考察—言語機能に焦点をあてて—」『中国地区英語教育学会研究紀要』25、221-233。
- 渡辺敦司。(2001)「前年度比15.3%増の4330万冊に」『内外教育』11月20日、2-4。

- Breen, M. P. (1987) Contemporary Paradigms in Syllabus Design. Part I. *Language Teaching*. 20(2), 81-92.
- Munby, J. L. (1978) *Communicative Syllabus Design: A Sociolinguistic Model for Defining the Content of Purpose-Specific Language Programmes*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Stenström, A. (1994) *An Introduction to Spoken Interaction*. U.S.A.: Longman.
- van Ek, J. A. (1975) The Threshold Level. In van Ek, J. A. & L. G. Alexander. *Threshold Level English*. Pergamon Press.
- Wilkins, D. A. (1976) *Notional Syllabuses*. London: Oxford University Press.

(提出日 2002年9月30日)

# **An Analysis of English Language Textbooks for Lower Secondary Schools in Japan with the Viewpoint of Fostering Students' Practical Communication Ability**

Naoto YAMAMORI\* , Takako FUJITA\*\* , Kazumoto TAKECHI\*\* ,  
Yoshiki HATA\*\* and Harumi ITO\*

The purpose of this study is to analyze English language textbooks authorized by Monbukagakusho for lower secondary schools with special reference to skits to foster students' practical communication ability. First of all, the concept of practical communication ability, which was one of the keywords stated in the course of study published by Monbusho, was discussed and a research framework was established to scrutinize the characteristics of the skits in newly published English textbooks from three perspectives: situation-setting, characteristics of dialogues, and language functions. After analyzing three kinds of textbooks based on the framework, the following characteristics were found. 1)New textbooks provide students with situations to use English which they possibly meet in their daily life. 2)There are some differences among textbooks in the main patterns of conversational structure. 3)The textbooks treat few language functions which show a speaker's subjective request with negative form (e.g. You must not ~. Won't you ~?, etc.). In conclusion, some pedagogical implications of the way of using new textbooks were mentioned according to those findings.

---

\* Department of English, Naruto University of Education

\*\* Graduate School of Education, Naruto University of Education